

瀬戸 SOLAN 小学校第1学年・学年通信



誰でも最初は初心者なんだから



瀬戸 SOLAN 小学校の第2回入学式が終了しました。

第2回と言っても、昨年とは会場も人数も内容も大きく変わりました。

特に今年から初めて行った「パフォーマンスタイム」や「クロージングムービー」はその象徴的な場面だったといえます。

小学校に入学するまでの6年間の中には、一人一人の子どもたちの成長のストーリーがたくさん詰まっていたことと思います。

そして、その大きな成長のスタートラインにはいつだって「はじめの一步」が存在したはずです。

はじめの一步を踏み出すその瞬間に至るまでには、誰しもがたくさんの「うまくいかない経験」や「試行錯誤」を体験します。

成長するためには、こうした行動や挑戦が欠かせません。

そして、行動すれば誰しもが失敗をします。

その過程で知識が増えたり、技を習得したりといった「成長」が生まれていきます。

つまり、行動と失敗と成長は、ワンセットなのです。

最初から上手にできる人など一人もいません。

だからこそ、その失敗や間違いは多くの可能性を秘めた宝だといえます。

そして、その行動や失敗ができるかどうかは、実は周りの人たち、特に子供の場合は周りの大人たちからの声掛けによる影響が非常に大きいと言われています。

この話にかかわる有名な実験を一つ紹介します。

スタンフォード大学の心理学者キャロル・ドゥエックは、ニューヨーク市内の12の学校である実験を行いました。

研究では、5年生400人あまりに、言語を用いない比較的やさしいパズルを課題として与えます。

テスト終了後、研究者たちは生徒達に点数を伝え、簡潔な言葉で褒めました。



半分の生徒には「あなたは頭がいいんだね」と彼らの知性を褒めます。

残りの半分には「一生懸命やったね」と彼らの努力を褒めました。

次に、先ほどの生徒たちにまた別のテストを2種類与え、生徒たち自身にどちらか好きな方を選ばせました。

ひとつは最初のものより難しいパズルですが、やればとても勉強になると説明されたものです。

もうひとつは、最初のものと同様の簡単なテストです。

すると、努力を褒められた子どもたちは、90%近くが難しい方のパズルを選択しました。

一方、知性を褒められた子どもたちは、ほとんどが簡単な方のテストを選んだのです。

大変興味深い結果です。

ドゥエック氏によると、知性を褒められた子どもは、「自分を賢く見せる」ことに気持ちを向けるようになり、間違いを犯すリスクをとれなくなるのだといいます。

いい結果を出したことを評価され続けた人にとっては、いい結果が出せなくなるかもしれない選択（新たな課題に取り組むこと）は避けたいという心理が働くからだそうです。

これは、学校で多くの子どもたちに同様にみられる姿です。
失敗を嫌がったり恥ずかしがったりする子の多くは、「自分のできること」には取り組みます。

反対に、新しいことや出来ない事にはなかなか挑戦ができません。

それは、「いい結果が出ないことが嫌」だからです。

失敗する自分の姿を恐れているのです。

いつも「できる自分でありたい」と思っているのです。

成長には、行動や挑戦が不可欠であるにも関わらず、です。

行動や挑戦の数が減れば、その分成長するチャンスは減ってしまいます。

行動しないから、成功も成長もしない。

これは一つの悲劇ともいえる状態です。

日本の教育現場では、この悲劇がたくさん起きています。

パフォーマンスタイムで実現したかったのは、その「挑戦」や「行動」を見守る「大人たちの温かい目線」でもありました。

安心して失敗できる環境。

そして、安心して挑戦できる環境。

これを真に作ることができたならば、子どもたちの力は大きく大きく伸びていきます。

何度も挑戦するからです。

難度でも失敗できるからです。

その素晴らしい教育環境を、保護者の皆様と共に作り上げていきたい。

私たちにとっても新たなチャレンジでもあったパフォーマンスタイムにはそのような願いを込めていました。

実際に、保護者の方からの温かいまなざしや拍手によって、子どもたちの表情にはたくさんの変化が見られました。

うまくいったかどうかという結果を気にしている子もいるかもしれません。

けれど、少なくともあの大きな舞台に挑戦しようとした姿に向けて我々大人がかかる言葉は「一生懸命やったね」でありたいと思うのです。

そして、その着実な成長を教職員と保護者の皆様が共に喜び合える関係を作れたならば、それは子どもにとって一番幸せな環境なのだと思います。

クローリングムービーを見ながら、入学式の良き日を共に振り返ることができた時間も、我々にとってはとても大切な時間でした。

ついつい文章が長くなってしまいました。

我々担任団も、全員がこの瀬戸 SOLAN 小学校で挑戦をしています。

今までの日本の教育現場で決まり切ったことを行っていれば失敗は少ないのかもしれませんが。

けれども、その分我々にも成長は多く生まれれないのだと思います。

子どもたちに「行動しよう」「挑戦しよう」と声をかけ続ける我々大人が、行動や挑戦の火を絶やさずに進んでいけるように、子どもたちと共に日々チャレンジしていきたいと思っています。

WANIMA の「やってみよう」という歌の大好きな一節を紹介して第2号の通信を終わります。

はじめよう やってみよう

誰でも最初は 初心者なんだから

やったことないことも やってみよう

苦手な相手とも 話してみよう

知らなかったこと 見たことないもの

あたらしい 楽しい